十度開門海峡を渡るこて

思はれ人

大玄海の波のうね亂れて急ぐ、
夕暮の風にをのゝく煤けたる
帆のはたゝや。勞れたる心の苦腦
鬱幽の室に蒸されし昏迷の
長き溜息、目眩く火輪のとゞろ
いつしかに。噫、汝を想ふ黑髪の
森の陰なる黑曜の炎の色を。

落日の濁るしたゝり、毒血の
雫をひきてのがれ去る老猛者のかげ、
冬空は黑黝色に古びたる
ゴム引き張りぬ。何時の日の何處にか見し
否遠き夢なる胎にいと鈍に
感せし光。自ら心慄へぬ
白き波泡立ち走る舷にたちて。

二重に繞る階段を昇りて行けば
塵迷ふ廊たちつゞく右左、
空洞の室は欠呻してゐらび。生に
倦んじたう心と心、たゆげなる
眼を持つ簇の喧々と喚く慵き
昨の夢ふと消ゆきて可懷しき
歎息かへれいとほのに心の奥ゆ。

けたまゝく長呻する海の怪
西海道は暮れ急ぐ霧にかくれぬ。
煌々ときらめき出てし電燈の
影よりひゞく對岸の市のどよみに
交らひてある眼を思ふ濡髪の
こぼるゝ袖の緋を抱いて五月の欄に
ほの見ゑし夕逝く水のにもひでや。

父無き國の西東かの幻境の

青き花あこがれゆけど思ひ寢の
夢だに許ちぬ筑紫路の三年の旅に
新しく戀ふ人も無き灯火の
影に痩せたる頬を母に見せにゆかばや。

故里の尾張は枯れし草の原
海見ぬ國の淋しさに我まつ人に。

（四十一年十二月二十四日）

短歌

泥　人の子

泥濘むこゝろの瓶の上澄みを人むごきかあませてまろこぶ。
愁傷よ喜悅の極と何わかつたゞ全身の脈亂しあり。
ゆへもなく去られにし女の胸に湧く想出のごと雲飛ぶゆふべ。
月の門君は皷くに我れ推すに慣れ來しかはす相並ぶ家。
をみなちの胸を彩る初色と血の氣にもゆる春のあかつき。
いくさある星の世界の野をすぎて木枯いまのわがむくろ吹く。
「陰謀せる衆の刃に強いて我れ色たゞしあり」この夢を見る。
秋の雲故郷山のたゝずまひつと暮れつゝと照りつほろびぬ。
秋の雨黑う朽ちぬる大木の檜原をうちぬこの期終るや。